

菅原道真研究

——『菅家後集』全注釈（十六）——

焼山廣志

一

今回は、前稿^①に引き続いて五言排律「484 敘意一百韻」の三回目の注釈を試みる。対象とするのは三十三句から五十六句までである。注釈を進める上での「凡例」は前稿^②のそれに倣う。以下、作品の注釈は便宜上、八句ずつに分けて行っていくたい。

二

484 敘意一百韻（その五）三十三句～四十句

本文

- 33 村翁談往事
- 34 客館忘留連
- 35 妖害何因避

平仄

- ○ ○ ○ ●
- ● ● ● ●
- ○ ○ ● ●
- ● ○ ○ ●

校異

- 因…由（刊本）
- 采…松（加越能）

- 栢（静嘉）（彰考）（尊一）（尊二）（尊三）（尊四）
- ▼ 栢 采イ（右傍注）（静嘉）（尊四）
- ▼ 頭注「采作栢」（大島）

訓読

- 33 村翁往事を談りて

- 36 悪名遂欲觸 ● ● ● ● ● ●
- 37 未曾邪勝正 ○ ● ● ● ● ●
- 38 或以實帰権 ● ● ● ● ● ●
- 39 移徙空官舎 ○ ● ● ● ● ●
- 40 修營朽采[＊]椽 ○ ● ● ● ● ●

*脚韻は下平声「先」韻 韻字は「連、觸、椽、椽」である。

- 34 客館留連を忘る
 35 妖害何に因りてか避けむ
 36 悪名は遂に鐫かんと欲す
 37 未だ曾て邪は正に勝たざれど
 38 或は實を以て権に帰す
 39 移徙るは空しき官舎
 40 修營す朽ちたる采椽

通釈

- 33 (宿に) 村の老人がやってきて、昔話を語ってくれると、
 34 (この太宰府に) 留め置かれているわが身の辛さを (片時
 だけでも) 忘れさせてくる。
 35 (わが身にふりかかった) この苛酷な災いを、どうして避
 けたらいいのだろうか (避けることはもはや無理である)。
 36 しかし (謀反の罪を着せられた私の) 悪い評判だけは、何
 としても晴らしたい。
 37 いまだかつて、邪は正に勝ったためしはないというが、
 38 ことによっては (今の私のように) 誠心誠意で行ってきた
 ことも、すべて謀略とみなされてしまう。
 39 人気がない寂しいひっそりとした官舎に移り、
 40 朽ち果てた粗末な建物 (住居) の修理をする。

語釈

- 33 ○村翁…村の年寄り、村叟。
 「杜甫、詠『懷顧跡』詩」に「古廟杉松巢『水鶴』、歲
 時伏臘走『村翁』」の句が見える。
 ○往事…過ぎ去ったこと。昔のこと。過去。
 「白居易、有『感詩』」に「往事勿『追思』、追思多『悲
 愴』」の句が見える。
 『漢語大詞典』には、「過去の事情」との説明を載せ、
 『荀子』成相の「觀往事以自戒、治乱是非亦可識」
 の一文を、また、劉長卿の「南楚懷古詩」の「往事
 那堪問、此心徒自勞」の句を引く。
 34 ○客館…賓客を招待するところ。客(旅人)をおく家。また
 宿屋。ここでは道真の官舎に移るまでの仮の宿舎を
 指す。
 『漢語大詞典』には、「招待賓客的處所、亦指旅店」
 と説明する。『春秋左氏傳』「僖公三十三年」に「鄭
 穆公使視客館、則束載、厲兵秣馬矣。」の句が見え
 る。また『菅家文章』「111 夏夜於『鴻臚館』、饑『北
 客婦』郷」に「客館争容数日局、惜別何為遲入夜」
 の句が、「234 得倉主簿寫情書、報以長句、兼謝州
 民不帰之疑」に「当州若不重来見、客館何因種小松」
 の句が、「269 寄白菊、四十韻」に「含情排客館、

抱影立荒村」の句が見える。

○留連…滞在する。停滞する。ぐずぐずして去るに忍びないさま。

『漢語大詞典』には、「①猶滞留、滞積」、「②猶流離流浪」、「③留恋不舍」と説明する。ここは道真が、旅の地（＝太宰府）に引き留められていることを指すと思われる。『菅家文章』194「始見二毛」に「我老於潘二十年、二毛何處甚留連」の句が見え、①「とどまる」の意で使っている。

↓補説 ①

35○妖害…奇怪な害毒（物事、とくに社会に害を及ぼす事柄）

奇妙な風評。怪しげな悪い評判

36○悪名…『大漢和辞典』では、「わるい名目、人間の悪い名目、

またよくない噂、悪い評判」と説明する。この場合、道真が醍醐天皇を廃し、女婿の齊世親王とよよの即位を計画したとの風評を指す。

『漢語大詞典』には、「懐名声」と説明する。『春秋左氏傳』「文公十八年」に「世濟其凶、增其惡名」の一文が、杜甫、「後出塞詩之五」に「惡名辛脱免、窮老無兒孫」の句が見える。

○鍋…払う、除く。

37○邪勝正…よこしまなものの力がまさって正義に勝つ。

『漢書』「禮樂記」に「世衰民散、淺薄邪勝正」の用例が、また『晋書』「五行志」に「若遇信道不篤、或燻虚偽、讒夫昌、邪勝正、則火失其性」矣」の一文が見える。

38○或…ことによつては、ある時は

○歸權…權謀にしてしまふ。

「歸」…服従する、くみする、帰属する、つき従う。「權」…はかりごと。物事を強制し、また処置する威力。

▼正道によらない変則的なものを「權」という。臨機応変の謀略（權謀）。

39○移徙…うつること。うつり動く。移転。

『漢語大詞典』には、「搬動住処、遷移」と説明する。『史記』「匈奴列伝」に「而单于之庭直代、雲中、各有分地、逐水草移徙」の一文が、『漢書』「司馬相如伝下」に「昔者洪水沸出、汎濫衍溢、民人升降移徙、崎嶇而不安」の一文が見える。

○官舎…官で建てて、官吏に与える住宅。

道真の宿舎は現在の榎社（大宰府天満宮末社）の地にあった無住の大宰府南館が建てられた。『郷土史

事典」(福岡県)によれば、当時、白茅や茨で葺かれた屋根は崩れ、垣根は破れ、井戸は砂や瓦で埋まっていた。手入れをしたがそれでも雨漏りし、着物や書物も濡れる生活であったという。(荒川美枝子氏教示事項)『菅家後集』477 詠楽天北窓三友詩」に「古詩何処閑抄出、官舎三間白茅茨」の句が見える。

40 ○修營…修め営む。『漢語大詞典』には、「修建」と説明する。

○松椽…松のたるき。松の木を切り出したまま加工を指定ないたる木(岩波古典大系本・底本)

○栢椽…「栢」は「屋根のひさし」。「のき」の意。軒のたるき。

○采椽…伐採したままで加工しないたるき。椽のたるき。質素な建物をいう。

▼「椽」は「丸いたる木」の意。家の棟から軒に掛け渡して、屋根を支える横木。四角なたる木を「桷」と言う。

岩波古典大系本では「松椽」となっており、他の写本では「栢椽」となっているものもあるが、ここでは韻の上からも意味を考える上でも「采椽」を採った。

↓ 補説 ②

補説 ①

▼34句目「客館忘留連」の解釈について

まず「留連」の語彙について再度考察を試みたい。既に【語釈】の頁で触れたように「滞在する」「停滞する」「ぐずぐずして去るに忍びないさま」等の意が考えられる。『大漢和辞典』では「①ぐずぐずして去るに忍びないさま」と説明する。

『漢語大詞典』は、「①猶滞留、滯積」次に「②猶流離、流浪」と説明し、『大漢和辞典』にいう義は、「④留恋不捨」と四義目で説明する。「⑦挽留」という七義目の説明も載せる。そこで、中国古典籍、とりわけ白詩の用例の一例を以下に検索してみる。

- ① 播觴聊就酌 為爾一留連 (0252)「東園翫菊」
- ② 留連向暮歸 樹樹風蟬鳴 (0247)「秋遊原上」
- ③ 脂膚莫手不牢固、世間尤物離留連
- 難留連易消歇、塞北花江南雪 (0595)「真娘墓」
- ④ 借助秋懷曠、留連夜臥遲 (0980)「山中問月」
- ⑤ 漸知吾潦倒 深愧爾留連 (2567)「答林泉」

この①の例は、「引きとめる」の意、②の例は、「(別の地に)滞留する。滞在する」の意、③の例は、「(手許に)引きとめる」の意、④の例は、「(去るに忍びなく)ぐずぐずしていること」、⑤の例は、「引き留める」の意となるのではあるまいか。一方、

道真自身の作詩用例は次の二詩に見える。

- ①人は初老路何遠 所以留連歲再巡 (357 「左金吾相公、於宣風坊臨水亭、饒別奥州刺史同賦親字。古調十四韻」)
②我老於潘一十年 二毛何處甚留連 (194 「始見二毛」)

この①の例は、「ぐずぐずしていること」の意、②の例は、「(他の所に)滞在する、滞留する」の意に解することが出来る。

以上のような用例から推測するに、「本来居るべき所に居らず、他所で引き留められている」こと、その事象そのものを意味する語、或いはその心情、つまり「引き留められて去り難い」意を含む語と考えられる。そこで、この道真の34句「客館忘留連」に目を移すと、「他所に引き留められていること」その事象そのものを、33句の「村翁」の「談義」によって、一時的ではあるが忘れることが出来たと詠んでいる内容と考えてみた。

つまりこの「客館」は、京から左遷され大宰府の謫居、官舎に移るまでの、「仮の宿舎」と想定されるので、「この太宰の地に(余儀なくして)留め置かれている。我が身の(酷な)現実を(しばし)忘れられたものだ(老翁の話に癒されたものだ)」と解釈できるのではないかと考える。そして「こうした思わぬ他人の芳情に慰められつつも、いや、それだからこそ、一層腹立たしいのは」と、自分を京から太宰の地に追放した者たちへ

の憤りを次の35句「妖害何因避」から38句「或以實歸權」の四句に込める展開となっているように思える。

補説 ②

▼40句目の「修營朽采椽」の「采椽」について

岩波古典大系本の底本である尊経閣本では、「松椽」となっている。一方、他の写本および刊本では「松椽」が「采椽」と記されている。

ここで、「采椽」について考察してみる。この「采椽」の語は、中国の古典籍に多用されているものである。以下、その一例を挙げてみると

- ① (『韓非子』堯之有天下一也、茅茨不_レ翦、采椽不_レ斲。
 - ② (『史記』李斯伝) 采椽不_レ斲、茅茨不_レ翦。
 - ③ (『史記』大史公自序) 堂高三尺、土階三等、茅茨不_レ翦、采椽不_レ刮。
 - ④ (『漢書』藝文志) 茅屋采椽、是以貴_レ儉。
 - ⑤ (『後漢書』漢陰老父伝) 昔聖王宰世、茅茨采椽、而万人以寧(注) 師古曰、采、柞木也、字作_レ採、本從_レ木、以_レ茅覆_レ屋、以_レ採為_レ椽、言_レ其實素_レ也。
- などを挙げることができる。

つまり「采椽」とは「伐採したままで加工しない、たる木」

のことである。以後、質素で粗末な建物を指す語となった。こ
こは道真の官舎のさまの表現と考えるならば、「采椽」がより
適っている。

さらに、韻を調べてみると「松」は「○」、「采」は「●」で、

×修營朽松椽 (○○●○○) (×) (二四不同を外す)
○修營朽采椽 (○○●○○) (○)

これは二四不同の原則からも「松」ではなく「采」でなけれ
ばならない。

従って、ここでは刊本等にある「采椽」を採る。

三

484 敘意一百韻(その六) 四十一句〜四十八句

本文

平仄

45	陳根葵一畝	○○○○●●
44	籬疎割竹編	○○○○●○
43	井壅堆沙磔	●●○○●●
42	廣袤少盈塵	●●○○●○
41	荒涼多失道	○○○○●●

46	斑藓石孤拳	○○●○○○
47	物色留仍舊	●●○○●●
48	人居就不悛	○○○○●○

*脚韻は下平声「先」韻。韻字は「塵・編・拳・悛」である。

校異

○表…表(静嘉)
○塵…塵(松平)

○堆…▼頭注「堆作推」(大島)

○畝…畝(静嘉)

○藓…藓(静嘉)(加越能)(松平)(尊二)(尊二)(尊三)

○藓…(内閣)(尊四)(太二)(太二)

▼頭注「藓作藓」(大島)

○仍…依(彰考)

▼頭注「仍作依」(大島)

訓読

41	荒涼として多く道を失ふ
42	廣袤塵に盈つること少し
43	井壅がって沙を堆くして磔む
44	籬疎にして竹を割りて編む
45	陳根の葵一畝
46	斑藓の石孤拳

- 47 物色モノシヨ留とどめて舊ふるに仍よる
48 人居アヒタマ就ついて俊あらず

通釈

- 41 (官舎の周囲は人氣も無く) 荒れはてて、官舎に至る道も迷って見失うありさまだし、
42 (官舎の) 敷地は、一畝半に少し足りないくらいの狭さだ。
43 井戸はふさがっていたので、(そのふさいでいる) 砂を掘り出して盛り上げ、(改めて) 甃い(いしたた) みしなおして使えるようにし、
44 まがきは破れてまばらになっていたので、竹を割って編み直した。

- 45 (うち捨てられた畑には) 冬葵の古い根が一畝残り、
46 まだらに藓こけ(こけ)の生えたこぶし大の石が、一つころがっていた。
47 (官舎の) この有様は、長く空き家だったころのままで(殺伐ころとし)、
48 私が住むようになって、(官舎の、この殺伐とした風景は) 変わることはなかった。

語釈

- 41○荒涼…荒れはてて物さびしいさま。荒寥。荒廢。
『漢語大詩典』には、「亦作『荒涼』」、「①荒蕪…入

烟蓼落」と説明し、南朝梁の沈約の「齊明帝哀策文」、
「經原野之荒涼、屬西成之云暮。」の例をあげる。
○失道…迷って道を見失う。

『漢語大詩典』に、②「迷失道路」と説明しているのが、これにあたる。杜甫の「送人從軍詩」に「馬寒防失道、雪没錦鞍韉」とある。

42○廣袤…(広袤) 地の面積をいう。「廣」は東西、「袤」は南北。

『漢語大詩典』では、「①指土地面積。從東到西的長度叫『廣』、從南到北的長度叫『袤』」と説明し、「淮南子」「天文訓」の「欲知東西南北廣袤之數者、立四表以爲方一里距」の用例を引く。
戸分の宅地の広さ。一畝半(一説に二畝半)。
「畝」…土地の広さの単位

『漢語大詩典』には、「古代平民一家在城邑中所占的房地、後泛指民居、市宅」と説明し、
『周礼』地官遂人「上地夫一廛、田百畝、菜五十畝、餘夫亦如之。」
〔孟子〕滕文公上「遠方之人間君行仁政、願受一廛而爲氓。」
〔孟子〕公孫丑上「廛、無夫里之布、則天下之皆悅、而願爲之氓矣。」

而願爲之氓矣。

の用例を引く。

○盈 ……超過する、あまる。

43 ○堆 ……うず高く積み上げる。

○甃 ……(動)かわらで井戸を作る。 ↓ 補説 ①

44 ○籬疎…竹や柴を粗く編んだ垣。「籬」は、「まがき、ませがき」の意で、「疎」は、「あらい、まばら」の意。

45 ○陳根…古い草の根。枯れずに年を越した宿草。

『漢語大詩典』には「逾年の宿草」として、『礼記』(檀弓上)の「曾子曰、朋友之墓、有宿草而不哭焉。漢鄭玄注、宿草、謂陳根也」の用例を引く。

○葵^{あひこ}…野菜の名。アオイ科の二年草。葉を食用にする。フアオイの古名。
(冬葵…アジアの亜熱帯・温帯に自生。古く日本に渡来し、種子を薬用、葉を食用にした。莖は直立し、高さ80cm。葉は円心形で五裂する。春から秋まで葉腋に小さい淡紅色の五弁花をつける)

『漢語大詩典』には「①蔬菜名。我国古代重要蔬菜之一。可腌制、称葵菹」と説明し、『詩経』「幽風・七月」・「六月食鬱及薺、七月亨葵及藷」の例を引く。

46 ○藪^{さく}…こけ ↓ 補説 ②

○孤拳…一つのこぶし。

47 ○物色…風物、景色。

『漢語大詩典』には「③形状、形貌」として、『後漢書』「逸民傳」の「帝思其賢、乃令以物色訪之。李賢注、以其形貌求之。」の用例を、また、「④景色、景象」の例として、南朝宋の鮑照の詩「秋日示休上人」の「物色延暮思、霜露逼朝榮。」をあげている。

↓ 補説 ③

○仍舊…「以前の通りと変わらない」、あるいは、「元の状態にもどすこと」

『漢語大詩典』には「照前不変或恢復原状」として、『魏書』「咸陽王禧傳」の「年三十以上、習性已久、容或不可卒革、三十以下、見在朝廷之人、語音不聽仍舊」の例を引く。

48 ○人居…人の住むところ。人家。民居。

○就…『漢辞海』では「①ついで」と訓じ、「(ア)…によって…にしたがって《行為が行われる対象や根拠を提示する》」と説明する用法が、これにあたる。

○倏…あらためる。

補説

▼①四十三句「髻」について

『大漢和辞典』の語義欄には、(四)「井戸がわをたたみ築く」とあり、次のような用例がある。

「易经」「井」文四、井髻無咎(疏)子夏傳曰、髻、亦治也。以樽墨井、修井之懷、謂之為髻。

また、太宰府市教育委員会文化財課のHP「遺跡だより39」(「井戸を掘る」)に、太宰府周辺で発掘された「井戸」についての詳細な説明がある。とりわけ「3. 井戸のいろいろ」、

「4. 様々な井戸」に「瓦積み井戸」の考察があり、参考になる。³⁾

(野田了介氏教示事項)

▼②四十六句「斑藓石孤拳」の「藓」について

この語は諸本によって異同がある所である。刊本では「藓」になっているが、内閣文庫本や太宰府天満宮本の写本では「藓」の字になっており、又、岩波古典文学大系本の底本である尊経閣文庫本他の多くの写本では「藓」になっている。韻はいずれも「仄韻」(●)だが意味が異なる。

○「藓(せん)」…隠花植物。こけ。

○「藓(せん)」…糸状菌の感染によっておこる非常にかゆい皮膚病。疥癬。

○「藓(はく)」…①セリ科の多年草。抑揚植物の一つ。

②藓荔(へいれい)…クワ科の常緑低木。つる性で壁や他の樹木につたう。

ここでは、前後の句意から考えて、刊本に採る「藓」の「斑藓石」として「まだらに苔のはえた石」と解釈してみた。

▼③四十七句「物色」について

菅原道真及びその周辺の詩人の作品の中で、どのような意味で使われているのか考察してみた。検索しえた作品を以下に列記してみる。

○「菅家文章」

39 「八月十五日夕、待月。席上各分一字」

五更待月事何如 物色|人情計會疎

75 「秋日山行二十韻」

日脚光陰走 年華物色|凋

○「田氏家集」

9 「九日上山行」

足輕遊觀到巖邊 物色|因秋觸處隣

76 「秋暮傍山行」

行看物色垂鞭去 日及西衢半路輝

右の『菅家文章』・『田氏家集』の詩中の「物色」は自然の風物、景色、自然現象などの意味で使われている用例と考えられる。したがってこの「箴意一百韻」の「物色」も、官舎の周りの風景・景色全般を指す語と解釈してみた。

四

484 箴意一百韻（その七）四十九句～五十六句

本文

平仄

- | | | | | | |
|----|---------------------|---|---|---|---|
| 49 | 隨時雖 ^ト 漏切 | ○ | ○ | ○ | ● |
| 50 | 恕己稍 ^ト 安便 | ● | ● | ○ | ○ |
| 51 | 同病求 ^ト 朋友 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 52 | 助憂問 ^ト 古先 | ● | ○ | ● | ○ |
| 53 | 才能終 ^ト 蹇剝 | ○ | ○ | ○ | ● |
| 54 | 富貴本 ^ト 迍遭 | ● | ● | ○ | ○ |
| 55 | 傅築巖 ^ト 邊耦 | ○ | ○ | ○ | ● |
| 56 | 范舟湖 ^ト 上扁 | ● | ○ | ○ | ○ |

*脚韻は下平声「先」韻、韻字は「便・先・遭・扁」である。

校異

- 雖^ト：虽（太二）（太二）
 - 己^ト：已（刊本）全本
 - 稍^ト：精 右稍（ミセケチ）（内閣）
 - 終蹇剝^ト：蹇剝終（尊一）（尊三）
 - 耦^ト：藕（大島）（刊本）全本
 - 湖^ト：胡（尊二）
- ▼頭注「藕作耦」（大島）

訓読

- 49 時に随ひて 漏切なりと雖も
 - 50 己を恕して 稍 安便なり
 - 51 病を同じうして 朋友を求め
 - 52 憂へを助けて 古先を問ふ
 - 53 才能 終に 蹇剝けんぱく
 - 54 富貴 本と 迍遭ちゆうざう
 - 55 傅が築は 巖邊に 耦くし
 - 56 范が舟は 湖上に扁なり
- 49 時折、たまらなくやりきれなくなることもあるが、
 50 なんとか心身を落ち着かせ安らごうとしている
 51 同病相憐れもうと思つて同じような悩みを持つた友を（古

通釈

典籍に)求める

52 愛い(左遷され流されてきた苦しみ)を(少しでも)軽くしたいと思つてそういう目にあつた先人のあとをたずねる。

53 才能などは(かえつて)時運に不利であり結局何の役にも立たない。

54 富貴の身とかいうものは、元来、行き悩んで困難にあうものだ。

55 傅巖の野で傳説は罪人に交じつて土木工事に従事していた(不遇の時代があつたし)

56 范蠡は扁舟(小舟)に乗つて、五湖から揚子江に浮んで去りゆくえをくらし(我が身の保身をはかつた)

語釈

49 ○隨時…時にしたがつて適宜にする。臨機。時の世の流れに従ふ。

『漢書』「匈奴傳」に「食草飲水、隨時轉移」の一語がある。

『漢語大詞典』では「順應時勢、切合、時宜」と説明し、『國語』「越語下」「夫聖人隨時以行、是為守時、韋昭注、隨時、時行則行、時止則止。任何時候。不拘何時」の一文を引く。

○偏切…「偏」は「せまい・心が狭い。物の見方や考え方が狭い。偏心」の意。「切」は「切実なさま」を言う。

50 ○恕己…「恕」は「あわれんで許す」の意。ここは、次の

『漢語大詞典』に、説明するように「自分自身を寛容にみること」の意で解した。

『漢語大詞典』では「①寛宥自己」と説明し、『楚辭』「離騷」の「羌內恕己以量人兮、各興心而嫉妬、王夫之通釈「如心謂之恕。君子之恕、如其心之忠也。小人之恕、如其心之邪」の一文を載せる。又、「②謂擴充自己的仁愛之心」と説明し、『抱朴子』「行品」の「垂惻隱於有生、恒恕己以接物者、仁人也」の例を引く。

○稍…ようやく。しだいに。(行為や状況が少しずつ進展することを言う。)

○安便…おだやか、やすらかな気分になること。「安」は「おだやか、平穩なさま」の意で、「便」は「やすらか、楽なさま」の意である。『漢語大詞典』では「安適」と説明し、『白氏文集』「新秋喜涼詩」の「老夫納秋候、心體殊安便」の句を引く。

51 ○同病…同じ病氣、又同じ病にかかる。又同じ病氣にかかった者。

▼「同病相憐」同じ苦しみをもっている者が互いに同情しあう。

○朋友…とも。ともだち。

『漢語大詞典』では「同学。志同道合の人、后泛指交誼深厚の人」と説明し、『易経』の「君子以朋友講習、孔穎達疏、同門曰朋、同志曰友、朋友聚居、講習道義」の一文を載せる。

52○助憂…つらい思いを（少しでも）軽くしようとする。「憂」は心配事、「助」は「救済する。すくう。のぞく」の意である。

○古先…祖先。いにしへ。

『漢語大詞典』では「往昔、古代」と説明し、『文選』「呉都賦」の「古先帝代、曾覽八紘之洪緒、六合而光宅」の用例を、又、杜甫「北征詞」の「憶昨狼狽初、事與古先別」の句を載せる。

53○蹇剝…時運の不利なこと。『漢語大詞典』では『易経』「蹇」に「蹇、難也」とある一文、及び『易経』「剝」に「剝、不利有攸往」とある一文を引き、「后因以蹇剝」謂時運不濟」と説明する。「蹇」も「剝」も易の卦の名。

54○富貴…家が富み、身分が貴いこと。又富み且つ貴くさせる、財産や地位に恵まれたさま。

○本…もともと。もとから。

○速遭…ゆきなやんで進まぬさま。困難が多く行き悩むこと。『文選』左思の「詠史八首之七」に「英雄有速遭、由来自古昔、李善注、周易曰、屯如遭如」の句が見える。

『漢語大詞典』では「①難行貌」と説明し、蔡邕の「述行賦」の「途速遭其蹇連、潦汗滯而為災」の句を、又「②處境不利、困頓」と説明し、張鷟の『遊仙窟』の「嗟運命之速遭、歎鄉關之眇邈」の用例を載せる。

55○傳…「傳説」の事。殷の高宗の相。高宗は夢に聖人を得たので、百工をして之を野に求めさせたが、傳巖中に隠れて胥靡刑人と共に壊れた道を修築していた説を得た。既にして説は高宗に見えて相となり、命により傳を以て氏とした。説命三篇を作る。

↓補説①

○築…土をつきかためる。

○巖邊…傳巖のほと。傳巖は「山西省、平陸県の東、三十五里の所にある傳という巖窟」を指す。

『漢語大詞典』の「傳巖」の頁では「①亦称傳險」。古地名。相傳商代賢士傳説為奴隸時版築于此、故称」と説明し、『尚書』「説命上」の「説築傳巖之野。孔傳、傳氏之巖在虞虢之界、通道所經、有澗水壞道、

○耦 ……常使胥靡築之、以共食或亦有成文也」の一文を引く。
……二人一組の仲間。二人ならんで畑仕事を。「耦耕」は「二人がそれぞれ鋤をかかえ肩を並べて耕す」の意。

家「乃乘扁舟浮於江湖」の一文を載せる。又、王昌齡の「盧溪主人」詩の「武陵溪口駐扁舟、溪水隨君向北流」の句を引く。

56 ○范舟…「范蠡」の乗った舟。

「范蠡」は「春秋越、楚の三戸の人。字は少伯。文種と共に句踐に事へ、苦身戮力、句踐と深謀すること二十餘年、竟に呉を滅ぼし、會稽の恥を雪ぎ、上將軍と称せられたが、大名の下、久しく居るべからず、且つ句踐の人と為り、患難を共にすべく、安樂を共にすべからずを以て、去つて斉に適き、姓名を変じて鴟夷子皮と称し、産、數千萬を致す。齊人、其の賢を聞き、相と為したので、復た、財を散じ尽し、去つて陶に止り、自ら陶朱公と号し、後、再び、巨万の富を致し、陶に來す。」

↓補説②

○湖 ……五湖。太湖のこと。中国江蘇省南部の太湖。南岸は浙江省に属する。震沢とも称する。

○扁 ……「扁舟」のこと。「扁」は「小さい」の意。小舟。

『漢語大詞典』では「小船」と説明し、『史記』『貨殖列傳』の「范蠡既雪會稽之恥、乃喟然而歎曰、計然之策七、越用其五而得意。既已施於國、吾欲用之

補説①
▼55目「傳築嚴邊耦」の句に込められている故事について

○『史記』卷三「殷本紀」第三の一文

武丁夜夢得聖人。名曰說。以夢所見視羣臣百吏。皆非也。於是迺使百工營求之野。得說於傳險中。是時說爲胥靡、築於傳險。見於武丁。武丁曰。是也。得而與之語。果聖人。舉以爲相。殷國大治。故遂以傳險姓之、號曰傳說。

〔史記會注考證〕本より引用

（ある夜、武丁は夢をみて、夢の中で聖人に出会った。その名を説と叫び、その夢に見た人相の者を求めて羣臣百官の顔を熟視したが、みな違っていた。そこで百官を動員して、似顔絵を作らせて民間に説に似た人をさがさせた。そして山西省の傳という岩窟の中で説を探しだした。この時、説は囚人で傳險で道路工事に使役されていた。召し出されて武丁に目通りすると武丁は「この人だ」と叫び、そしてともに語ってみると、果して聖德の人であった。挙げ用いて宰相とした。殷は大いに治まった。故に傳險にちなんでこれを姓として与え傳説といつ

た。)

〔新釈漢文大系〕本の「通釈」より引用

○『孟子』卷第十二「告子章句下」の一文

孟子曰、舜發於畎畝之中、傅説擧於版築之間、膠鬲擧於魚塩之中、管夷吾擧於士、孫叔敖擧於海、百里奚擧市、故天將降大任於是人也、必先苦其心志、勞其筋骨、餓其體膚、空乏其身行、拂亂其所爲、所以動心忍性、會益其所不能、人恒過、然後能改、困於心、衝於慮、而後作、徵於色、發於聲、而後喻、入則無法家拂士、出則無敵國外患者、國恒亡、然後知生於憂患而死於安樂也、

〔孟子がいわれた。舜は田畑を耕す農夫から身を起こして、ついに天子となり、傅説は道路工事の大夫から挙げられて武丁の宰相となり、膠鬲は魚や塩の商人から文王に見出され、管夷吾は獄吏の手に囚われた罪人から救い出されて桓公の宰相となり、孫叔敖は海辺の貧しい生活から楚の莊王に取りたてられて令尹（楚の宰相）となり、百里奚は賤しい市民から秦の穆公に挙げ用いられて宰相となった。故に、これら古人の実例を見ても分かるように、天が重大な任務をある人に与えようとするときには、必ずまずその人の精神を苦しめ、その筋骨を疲れさせ、その肉体を飢え苦しませ、その行動を失敗ばかりさせて、そのしようにする意図を食い違うようにさせるものだ。これは天がその人

の心を発憤させ、性格を辛抱強くさせ、こうして今までにできなかったこともできるようにするため〔の貴い試練〕である。いつたい、人間は〔多くの場合〕過失があつてこそ、はじめてこれを悔い改めるものであり、心に苦しみ思案に余つて悩みぬいてこそ、はじめて発奮して立ちあがり、その煩悶や苦悩が顔色にもあらわれ、呻き声となつて出てくるようになってこそ、はじめて〔解決の仕方を〕心に悟るものである。国家といへどもまた同様で、内には代々法度を守る譜代の家臣や君主を輔佐する賢者がなく、外には対抗する国や外国からの脅威がない場合には、しぜん安逸にながれて、ついには必ず滅亡するものである。以上のことを考えてみると、個人にせよ、国家にせよ、憂患の中にあつてこそはじめて生き抜くことができ、安樂にふければ必ず死を招くということが良く分るのである。〕

〔本文・訳文とも、小林勝人訳注

『孟子下』（岩波文庫）による〕（傍線筆者）

補説 ②

▼56句目「范舟湖上扁」の句に込められている故事について

○『史記』卷一二九「貨殖列傳第六十九」の一文

范蠡既雪會稽之恥。乃喟然而歎曰。計然之策七。越用其五而得意。既已施於國。吾欲用之家。乃乘扁舟浮於江湖。變名易姓、適齊爲鴟夷子皮、之陶爲朱公。

〔史記會注考證〕本より引用）（傍線筆者）

考察

以上、55句「傳築巖邊耦」と56句「范舟湖上扁」の二句に込められている「故事」について、出典の考察と内容の吟味を試みたが、再度、道真の詩におけるこれらの「故事」の意味するものを整理しておきたい。

〔范蠡〕は会稽の恥をすすいだのち、やがて大きなためいきをつけていった。計然がのべた方策は七つあった。越の国はそのうち五つだけを用いて思いどおりになった。国家において実効があった以上は、わしはあのやりかたを個人でやってみよう。それから小船に乗って太湖から揚子江へ浮び出、名も性も改めて、齊へ行っては鴟夷子皮と称し、陶へ行っては朱公と称した。）

〔新釈漢文大系〕本の「通釈」より引用）（傍線筆者）

○『蒙求』『范蠡泛湖』の一文

「権力者の圏外である湖沼や海上に逃れた人の話。（中略）范蠡は呉を滅ぼした後、保身を計って舟を五湖に泛（う）かべ逃れた」（『新釈漢文大系 蒙求』早川光三郎氏の〈題意〉より引用）話を載せる。

范蠡事越王勾踐、苦身戮力、與勾踐深謀二十餘年。竟滅呉、報會稽之恥。以爲大名之下難以久居。且勾踐可與同患、難與處安。乃裝其輕寶珠玉、與其私徒屬乘舟浮海以行、終不反。齊變姓名。自謂鴟夷子皮。（下略）

〔蒙求下〕早川光三郎著

新釈漢文大系59 五九〇頁より引用）

突如として、太宰の帥の左遷の命を受けて追い立てられるように京を後にしてきた道真に太宰の地で待ち受けていたのは、太宰の地に着いて仮に与えられた宿所から数日を経て、荒れ果てたこれからの宿舎となる官舎に移る、その時から新たに始まる精神的苦痛、孤独感、疎外感、寂寥感、そして何よりも辛かったのは、こうした厳しい現実を、現実のものとして受け入れなければなかった苛酷な現状ではなかったか。京より太宰の地を踏むまでは、「これは夢ではないか、いや夢であって欲しい」という、どこかに自己を安んずせ、逃避させられる空間が存在したものが、道真の目から見て余りに苛酷な太宰の地の様は、自分の今の置かれている逃げようのない状況を、容赦なくつきつけたものであったに相違ないと思われる。そしてその道真が心の支えとして得ようとしたものは、この今の苛酷な現状と類似した体験を持つ、過去の偉人たちのそれに倣い、追体験をする以外に、今の自分を鼓舞できるものは存在しなかった所に、この詩を創作しようとした時に発想を得たと思われる白居易易らのそれとは全く異なる、「道真の筆舌に尽し難い孤独感が

あったこと」を改めて想起する必要があるのではないだろうか。この四章で取り上げた51句「同病求朋友」や52句「助憂問古先」は、55句「傳築巖邊耦」に込められた「傳説」の故事の出典の考察で述べた「史記」等の一文の内容であり、「孟子」「告子章句下」の一文の内容に他ならない。とりわけこの『孟子』の一文が道真をどれほど勇気付けたものであったか、想像に難くない。そして更に、56句の「范舟湖上扁」に込められた「范蠡」の故事を理解すれば、権力者の圏外に自分の身を置くことの出来なかつた我が身の無念さが、一層際立ってくるのである。そしてこの道真の古人の求める目は、57句の「長沙沙卑濕」に込められた賈誼の故事や58句目の「湘水水澹漆」に込められた屈原の故事の世界へと向かうのである。

あわせて、53句の「才能終蹇剝」の意味するのは、「傳説」の故事が理解できれば、55句目の「傳築巖邊耦」の句内容と呼応しているものであり、同じく54句目の「富貴本逆遭」の意味するものは、56句目の「范舟湖上扁」の句内容である「范蠡」の故事と見事に呼応している句作りになっていることも見逃してはならないと思う。

【注】

(1) 拙稿「菅原道真研究―「菅家後集」全注釈(十五)」「有明工業高等学校 門学校紀要」

(2) 拙稿「菅原道真研究―「菅家後集」全注釈(二)―」

第四十三号

「国語国文学研究」第三十六号 熊本大学国語国文学会
(3) 太宰府市教育委員会文化財課「遺跡だより39」

<http://dazaininima.co.jp/kureai/seki/dayori/39/>

〈追記〉(一)

この稿を草するにあたり、木下文理氏より多大のご助力をいただいた。とりわけ、語釈、「白氏文集」の詩語の検索などにお力添え頂いた事に深謝申し上げる。

又、台湾元智工學院の中國古典詩詞曲文研究のためのサイトである「網路展書讀(BIG5)」(<http://ds.admin.yzu.edu.tw/>)の『全唐詩』の項、及び北京大学中文系の唐代以前の詩歌の総合データベースである「全唐詩全文檢索系統(UTF-8)」(<http://chinese.pku.cn/cgi-bin/langlibrary.exe>)を詩語檢索の為に大いに利用した。

〈追記〉(二)

平成十八年四月より、「大牟田市民大学講座」→市民大学ゼミ、道真梅の会りの会員、須藤修一氏、諸田素子氏、田中陽子氏、野田了介氏、井原和世氏、荒川美枝子氏の六名と定期的に「敘意二百韻」の講読会を催している。

本稿は、この会で討議・検討したものを基に加筆し稿をしたためたものである。とりわけ(その五)は荒川美枝子氏の、また(その六)は野田了介氏、(その七)は井原和世氏の調査報告に教示を得ること大である。深謝申し上げます。

(やきやま ひろし) / 大学院第七回修了・有明高専